2019 年度（2019 年 9 月）

Diploma Policy に関わる卒業（観点別・就業力）アンケート結果について

長崎外国語大学では、卒業認定・学位授与の方針（Diploma Policy）については以下のように定めている。

長崎外国語大学では以下のような能力を身につけ、かつ所定の単位を修得した学生に、卒業を認定する。

(1)学部共通カリキュラムの多面的履修を通して、基礎的な学習能力を養うとともに、人間・社会・自然に関する知識を自らと関連付けて理解し、専門領域を超えて問題を探求する姿勢を身につける。

(2)学科における体系的学習と学科を横断する幅広い学習とを通して、外国語の運用能力と専門分野の知識を獲得し、地域や現代世界の多様な課題を発見、分析、解決に導く能力を身につける。

(3)４年間にわたる教室内での学びや、プロジェクト科目、海外留学、卒業論文等の作成を通して、知識の活用能力、批判的・論理的思考力、コミュニケーション力、 課題探求力、問題解決力、リーダーシップなどを総合する力を身につける。

かかる Diploma Policy（以下 DP）に基づいて Curriculum Policy（学士教育課程の編成方針）が設計されることになるが、DP において学生が身につけるべき能力をカリキュラムマップ上において科目群毎、各科目毎に明示している。つまり、教育課程編成上のどの科目でどのような能力が養われるのかを明らかにしている。身につけるべき能力を５つの観点によるカテゴリーに大分類し、さらにその 5 つのカテゴリーを小分類化して教育課程上に科目を位置づける（カリキュラム･マップ）ことによって、学生たちが養うべき能力を見極めながら科目の選択を行える体制をとっている。（DP による 5 つの観点はシラバス上に記載してある。）

卒業時に行うこのアンケートは、1 年生秋学期から毎学期行われているもので、DP に関わる本学での 4 年間の学修に対する学生による最終的な自己点検評価であり、本学の 3 つのポリシーに新たに加わるアセスメント･ポリシーに関わるものである。このアンケート結果によって、さらなる３つのポリシーの改訂や教育課程の編成などに生かしていく所存である。

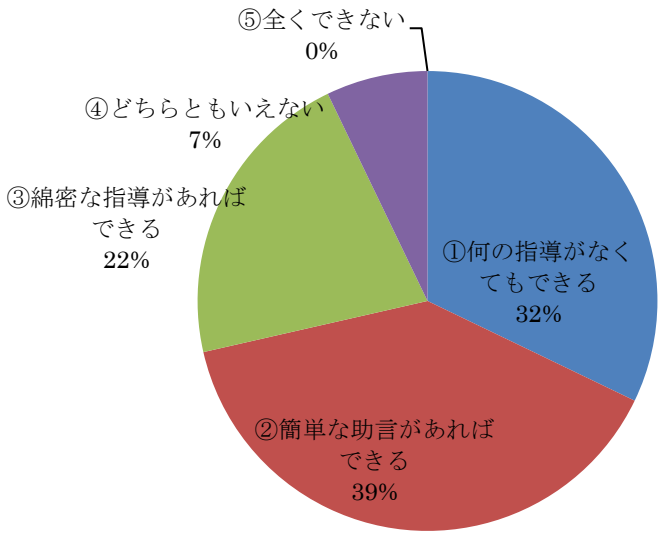
次ページ以下では、各カテゴリ別に簡単ではあるがコメントを付している。なお、本報告は、学科毎ではなく、2 学科あわせた学部（卒業者 33 名のうち回答者 28 名 : 回答は実数）としてのアンケート結果によるものである。なお、アンケートは以下の観点別能力についての自己点検評価として回答を行う。

教育支援部長
小鳥居伸介
2020 年 10 月 8 日

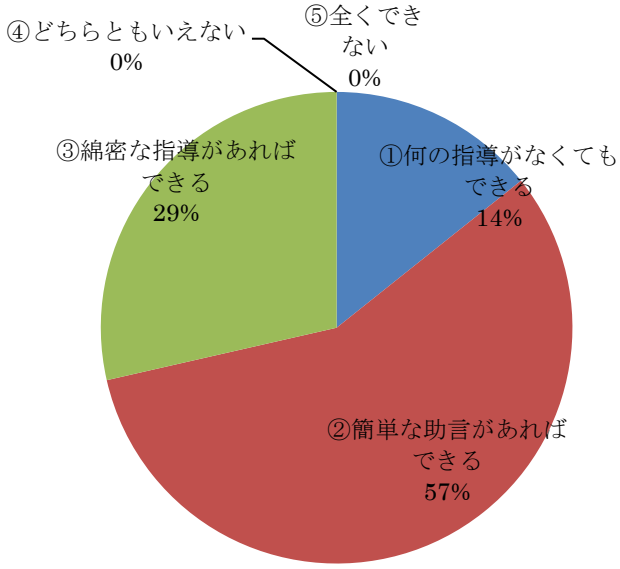
		①何の指導がなくてもできる	②簡単な助言があればできる	③綿密な指導があればできる	④どちらともいえない	⑤全くできない	無回答	合計
カテゴリA［理解し、知識を取り込む力］	1. 歴史・社会・自然を自らと関連付けて理解し、説明することができる。	9	11	6	2	0	0	28
	2 専門分野における知識を体系的に理解、実践に応用することができる。	4	16	8	0	0	0	28
	3. 進路の多様性や特質について理解し自らの進路選択に効果的に活用することができる。	9	12	7	0	0	0	28
カテゴリB［論理的思考力・問題解決力］	4. 情報や知識を多角的な視点から論理的に分析し表現できる。	12	7	6	2	1	0	28
	5. 論理的思考に基づき、様々な状況に応じて的確な判断を下すことができる。	14	8	6	0	0	0	28
	6. 問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を解決に導くことができる。	12	11	4	1	0	0	28
カテゴリC［態度・意欲］	7. 自らを律し、自立して積極的に行動できる。	11	12	4	1	0	0	28
	8. 異なる文化に対して、深い認識と共感を持って接することができる。	13	9	5	1	0	0	28
	9. 社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために積極的に関与できる。	10	11	6	1	0	0	28
カテゴリD［コラボレーションとリーダーシップ］	10. 目標達成のために他者と協調・協働して行動できる。	15	8	5	0	0	0	28
	11. 目標達成のために他者に方向性を示し、協力を得ることができる。	12	13	2	1	0	0	28
カテゴリE［効果的なコミュニケーション力］	12. 日本語で正確に意思の疎通を図ることができる。また、理論的に記述し、的確に発表し、討議を行うことができる。	12	10	3	2	1	0	28
	13. 少なくとも一つの外国語を用い、正確にコミュニケーションを図ることができる。	15	7	4	2	0	0	28
	14. 情報通信技術を用いて多様な情報を収集分析し、効果的に活用することができる。	13	10	5	0	0	0	28

カテゴリ A　[理解し、知識を取り込む力]

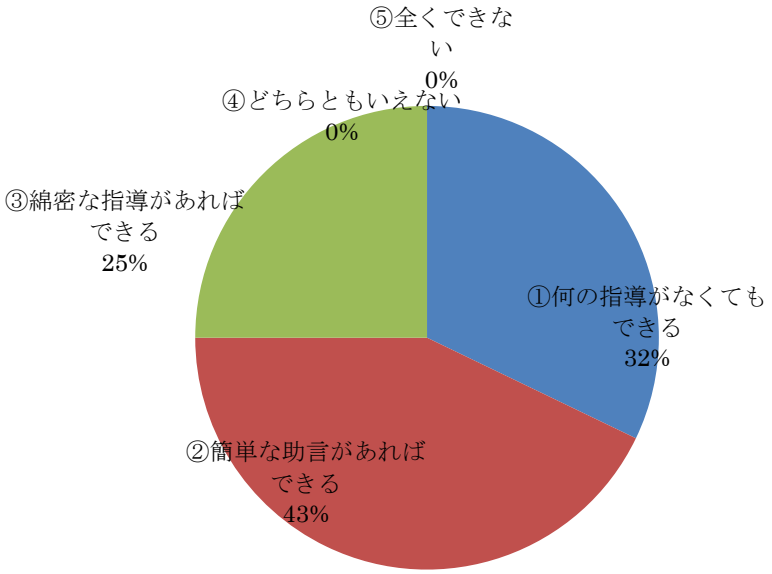
1.　歴史・社会・自然を自らと関連付けて理解し、説明することができる。



2　専門分野における知識を体系的に理解し、実践に応用することができる。



3.　進路の多様性や特質について理解し、
自らの進路選択に効果的に活用することができる。



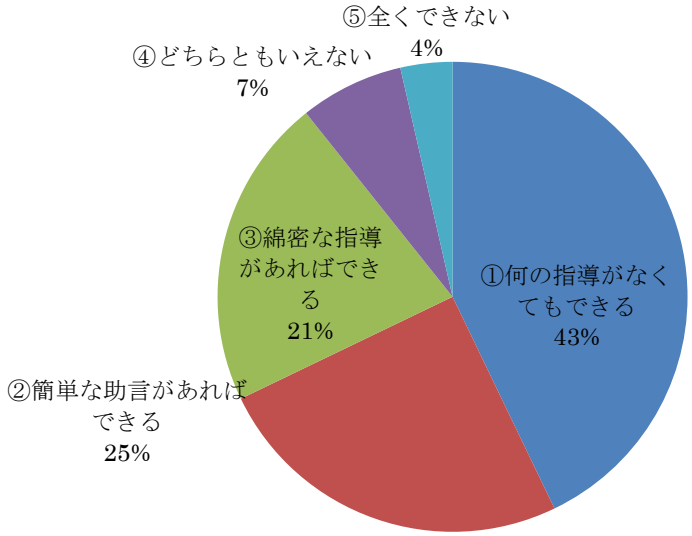
カテゴリAは、いわゆる知識や教養を身につける力、インプット能力の自己評価である。

９月卒業者については、「何の指導がなくてもできる」と「簡単な助言があれば・・」と自己評価した学生の合計の比率は３月卒業者とほぼ同じ程度である。明確な誘導や簡単な指導に従うことなしに、必要とする情報や知識を獲得したり、これを適切に活用したりすることは難しいと自己評価している学生がやはり多いことを意味している。多角的で多様な情報や知識の中から、自分なりに取捨選択しながら必要なものを取り込む際の主体が確立していないことが課題かもしれない。

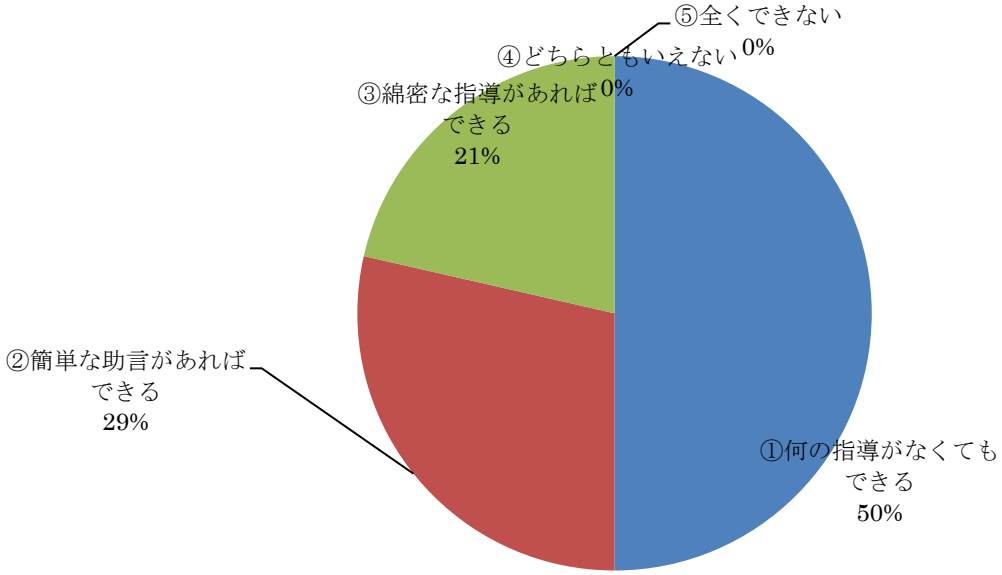
主体的な学びを育むことが求められていることから見れば、カテゴリＡにおける「何の指導がなくてもできる」割合を向上させていくためにはどうすれば良いのか、知恵を出し合うことが必要だろう。

カテゴリ B　[論理的思考力・問題解決力]

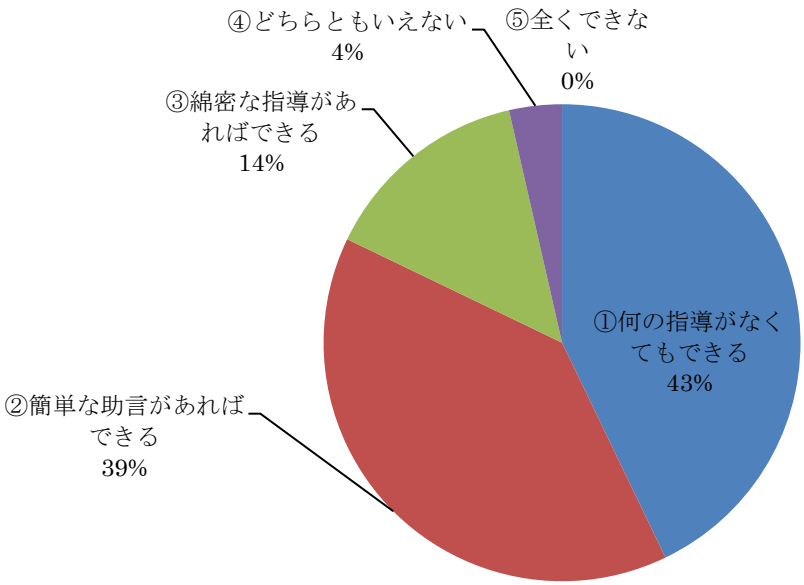
4.　情報や知識を多角的な視点から論理的に分析し表現できる。



5.　論理的思考に基づき、様々な状況に応じて的確な判断を下すことができる。



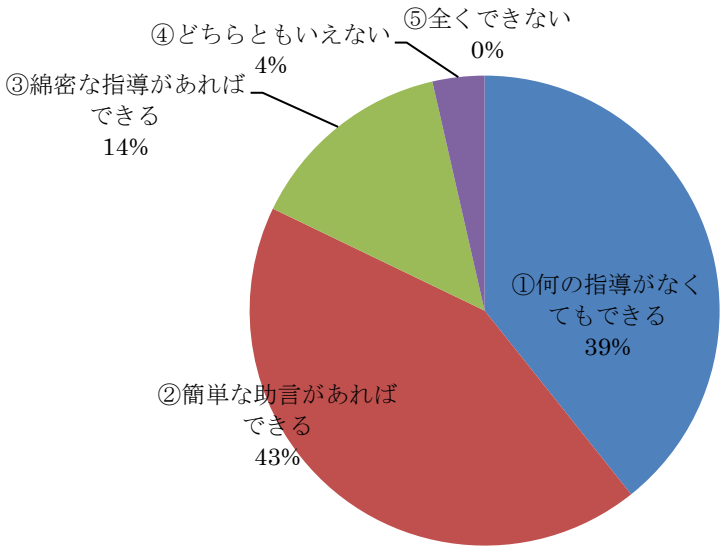
6.　問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を解決に導くことができる。



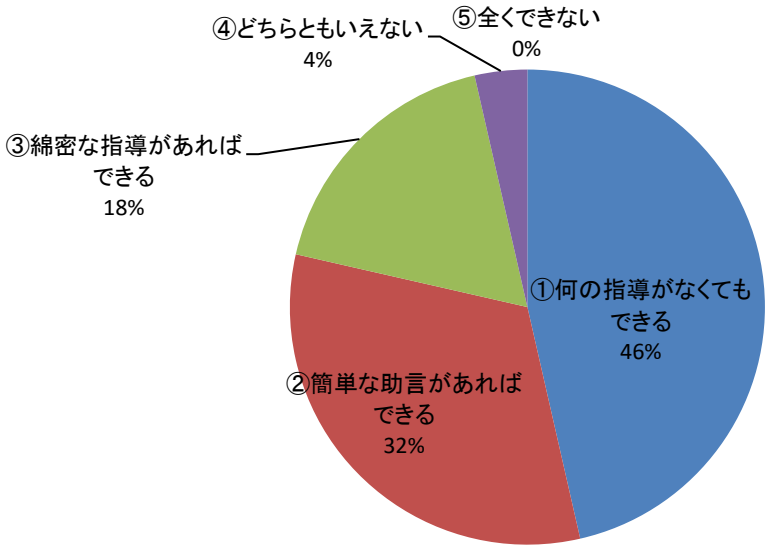
カテゴリＢは、発見力・分析力・思考力・判断力・意志決定力・課題解決力などに関する自己評価である。「何の指導がなくてもできる」「簡単な助言があればできる」の合計は３月の卒業者より７～10%ほど高い。また、昨年度９月の卒業者と比べてもやはり７～10%高い。教育の効果なのか、それともこの年度に限りもともと優秀な学生が多かったのか、継続的に数字を追って検討してみる必要がある。総じてカテゴリＡと同様、主体的学修力育成の観点からすれば、このカテゴリも「何の指導がなくてもできる」学生たちを輩出するためにどうすれば良いのかが課題である。

カテゴリ C　[態度・意欲]

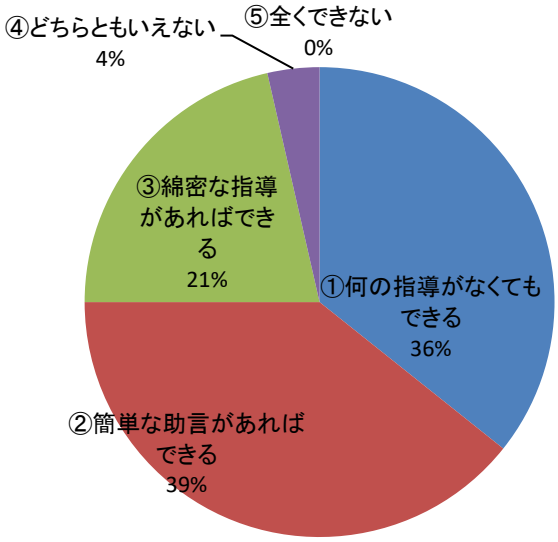
7.　自らを律し、自立して積極的に行動できる。



8.異なる文化に対して、深い認識と共感を持って接することができる。



9. 社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために積極的に関与できる。

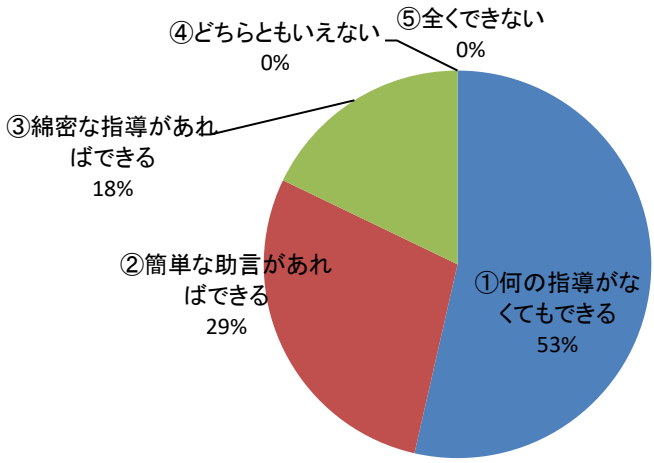


カテゴリＣは、行動力や積極性、認識力や社会性などに関する自己評価である。

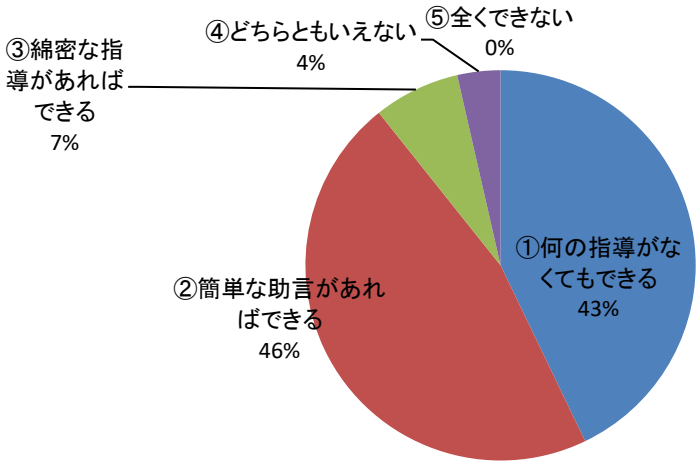
他のカテゴリと同様に、「何の指導がなくてもできる」「簡単な助言があればできる」を合わせると、４人に３人が積極的に行動できる、また異文化交渉に問題を感じないと自己評価している。「７．」「８．」については、３月卒業者と同様に、８割程度の学生が肯定的に自己評価していることが分かる。「９．」についても、３月卒業者及び昨年度９月卒業者とほぼ変わらない。

カテゴリ D　[コラボレーションとリーダーシップ]

10.　目標達成のために他者と協調・協働して行動できる。



11.　目標達成のために他者に方向性を示し、協力を得ることができる。



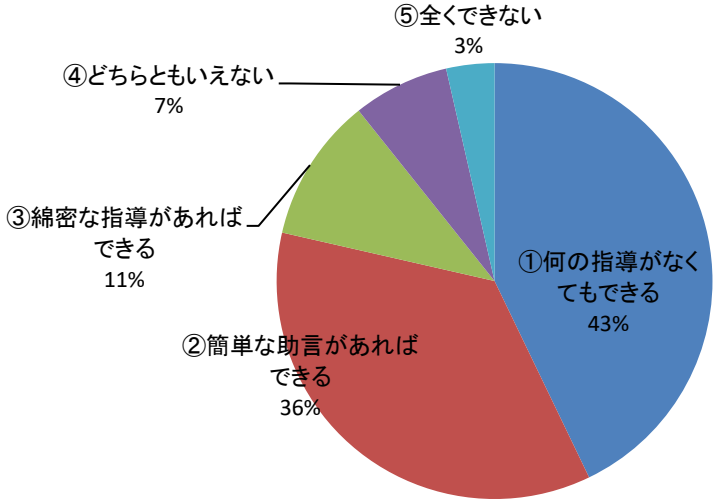
カテゴリＤは、協調性や協働力、実現力や率先力などに関する自己評価である。

「10.　」「11.　」ともに３月卒業者と比べて大きな違いはない。しかし、昨年９月卒業者と比べて「10.　」の「簡単な助言があればできる」が23%も少ないのが気になるところである。先のカテゴリBは高かったが、その分他者との協調がやや苦手な学生が多かったのかもしれない。いずれにしても、協働力と率先力は、一見すると相反するように思われるが、組織的目標実現行動における能力として求められるものであり、本学の学生たちがその両方において総じて高い自己評価を与えていることは心強いものがある。

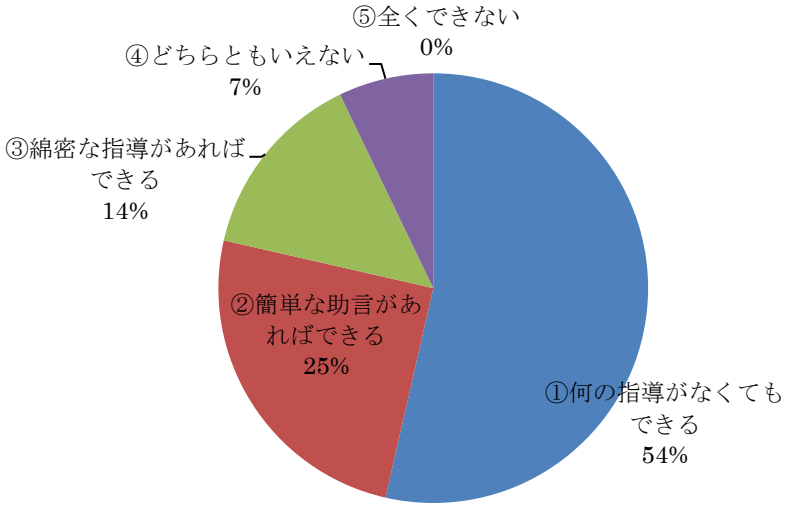
なお、カリキュラムマップにおいて本カテゴリの能力を育成する科目がきわめて不足しているにもかかわらず、それでもなお本学学生の自己評価の高い本カテゴリ能力を伸ばすためにも、教育課程における科目設計が必要だと考える。

カテゴリ E　[効果的なコミュニケーション力]

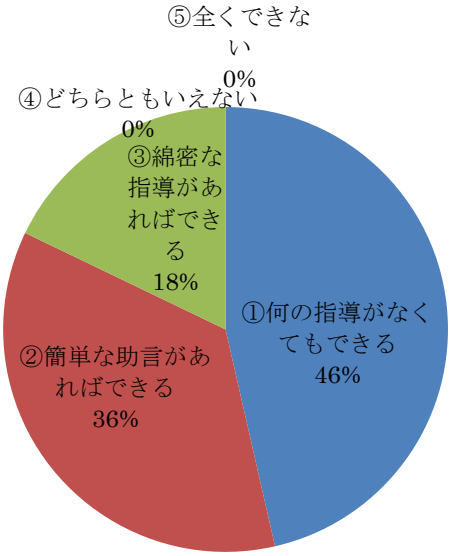
12.　日本語で正確に意思の疎通を図ることができる。
また、理論的に記述し、的確に発表し、討議を行うことができる。



13.　少なくとも一つの外国語を用い、
正確にコミュニケーションを図ることができる。



14.　情報通信技術を用いて多様な情報を収集分析し、効果的に活用することができる。



カテゴリＥは、コミュニケーション力や表現力、ICTなどに関する自己評価である。

本学においても重要なカテゴリと言える。項目「12.　」と「13.　」において、少なくとも「何の指導がなくてもできる」「簡単な助言があればできる」を合わせて90%以上の数字がほしいところである。「12.　」については３月卒業者とはほぼ変わらないが、昨年９月卒業者と比べて12%低い「13.　」は３月、昨年９月卒業者とほぼ同じである。その他のカテゴリの成果を活かすためにも、これまでと同様に、この点はやはり検討課題となろう。

ICT に関しては３月卒業生と同様に、思ったほど高い数字が出ていないのは、昨今の PC 離れとも言われている現状を示しているようである。しかしながら、この９月卒業者に限っては「14.　」における①、②を合わせると３月卒業者よりも 10%高い。また、「何の指導がなくてもできる」の回答が３月卒業者よりも 15%、昨年 9 月卒業者よりも 27%も高いのは、この年度の卒業者に限った特徴かもしれない。いずれにせよ、今後の ICT 教育の一層の強化が求められるところである。

カテゴリ A から B について「何の指導がなくてもできる」および「簡単な助言があればできる」との回答はおおむね７割台で、カテゴリ C、D、E についてはおおよそ７割~８割台の回答率となっており、それぞれのカテゴリでコメントしたように、こうした点が本学学生の特徴であるといってよいのだろう。

(以上)